

## 新型コロナウイルスがもたらす 閉塞感からの脱却

青木 優（進学情報センター）

今年に入ってから顕在化した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の、人類への影響はいまだ計り知れない。現時点ではコロナ禍の最中と認識している人が多いであろうが、「ポストコロナ」あるいは「ウィズコロナ」に向けて経済社会活動を段階的に正常化させている最中でもある。東京大学も、感染拡大の防止を第一に考えつつ、徐々に活動制限を緩和している段階だ。このような禍下における人間の心理や行動というのはそれこそ千差万別である。多くの人にとっては、物理的な距離の隔たりがストレスになり、感染症が直接的要因ではなく体調を崩してしまった人も無視できないほどいるようだ。

私の場合はというと、他の教職員と同様、4月中旬以降在宅勤務に切り替わり、進学相談もメールでのやり取りのみとなっていた。幸い家族がいて、人との物理的な断絶はゼロではなかったのもあり、必要以上のストレスは感じず、平穏な生活だった。心理学的用語を用いると、私は正常性バイアスが強い人間に分類されるようだ。好ましくない異常事態が多少生じても「これは正常の範囲内」と捉え、平静を保とう（大丈夫だと思こも）とする、つまりは人一倍楽観的、楽天的であるのだろう。こうした性格が災いしてか、家庭内の危機管理を司っている妻に「危機意識が足りない」とよく諭される（どやされる）。ただし、私は実験科学者の端くれであり、合理的な思考をもって（自然）現象をとらえることが習性となっている。なので、指摘事項に対して合理性を見いだせば素直に受け入れるし、見いだせない場合はディベートになる（夫婦喧嘩ではない）。前置きが相当に長くなってしまったが、自らを合理的な楽観主義者と信じている私から、進学に限らず何らかの不安を抱えているだろう、前期課程の学生に何かアドバイスはないかと考えたので、その思いを記す。

今年度入学の一年生は、入学試験が厳戒態勢の中で行われ、入学手続きや新入生ガイダンスやオリエンテーションが例年より大きく制限され、入学式が中止となり、初っ端から授業がすべてオンライン化

となり等々、適切な言葉が見つからないほど散々な目に遭っていると言わざるを得ない。中には、東京から離れた実家から授業を受けている人もいるだろう。また、二年生の皆さんも、東大生としてはプライオリティの高い位置づけとなる進学選択の行事を間近に控えている。大学に訪れることが困難なので、考慮している進学先における学究のシステムや難易度などの情報収集に制限があり、適切に進路を決定できるか大きな不安を感じている人もいるだろう。しかしながら、こうした未曾有の危機がある時、その困難が人を大きく成長させることを多くの体験者たちは様々な言葉で表現し、具現化している。そして私は、自らの老いや硬直を感じているからかもしれないが、若者たちの高い障壁を乗り越える姿に目を奪われてしまい、そのとき発する言葉に感銘を受けてしまう。東日本大震災の被災者だった羽生結弦選手が、それ以降世界的なスケーターへと成長したこと、まさにこれからというときに白血病になった池江璃花子選手が、闘病生活を経て競技への復帰を目指すこと、直近では、コロナ禍で対局できずにいた藤井聡太七段（執筆時）が、潜伏期間を経て二つのタイトル戦に挑むまで飛躍する等々、枚挙にいとまがない。

身近な例で、現在中学一年生の愚息のことを紹介しよう。当時卒業を間近に控えた6年生の3月から突然の休校、練習も出来ない状態で24日にぶっつけ本番の小学校卒業式、4月は7日の中学入学式以外は1日のみ登校、連休明けても非常事態宣言の解除とならず、週に一回、週に二回、と徐々に登校日が増え、6月15日に漸く通常登校にたどり着いた、という次第だ。友達とじゃれ合うのが日課ようになっていた彼にとって、2か月半にわたる外界との物理的隔離は相当なストレスであったことは想像に余りある。しかしながら、彼はICTの世界に心をゆだねることで、つまりは精神的な触れ合いを求めることで解消することを試みた。具体的に言うと、タブレット端末やゲーム機を用いて、通信技術を通して外界の世界に羽ばたいていったのだ。特に、チャット機能を織り交ぜたオンラインゲームは双方向のコミュニケーションが取れるようで、健全かどうか不明だが、彼の社会性の維持に一役買っていたようだ。また、彼は剣道を学んでいるのだが、稽古中止が続く中Zoomを用いた「オンライン素振り」に参加し

ている。「手が痛い、足が痛い」といいながら真に楽しんでる姿を見るたびに、ただ強いという言葉では説明できない、精神のしなやかさを認識せざるを得ない。

若者の適応力の高さは、前期学生の君たちにも当然感じている。前期課程において化学の教員である私は、まさにオンライン授業へと舵が切られたS1タームに、理科二年生の必修科目「物性化学」という週二回開講の講義を担当した。始めの二週間計4回分は休講自習とし、3週目の4月20日から、Zoomミーティングによる9回のオンライン授業を開催した。(とはいっても、接続テストを兼ねて2週目からミーティングは開催していたのだが)前もって講義資料を配布し、それをもとに紙芝居のような形式で授業を行ったのだが、出席率が非常に高く(ミーティング参加者が把握できる)、「～を知っている人挙手してください」と質問したときの反応もよい。チャットを用いた質問や資料の間違いの指摘も非常にスムーズかつ適切に行われ、ITC-LMSや電子メールを手段とした問い合わせも多くなされた。勿論、教室でいろいろな小道具を見せながら授業をすることが出来ず、本来できることができない面も多々あった。しかし、教員と学生の精神的な壁が、面前で行うより低くなっているのではと感じる瞬間もあったのは予想外だった。

オンライン化による、双方向コミュニケーションのしきいの低さは別のケースでも感じられた。私は進学情報センターの専任教員で、毎年4月に「進学選択シンポジウム 私はどのようにして進路を決めたか」を開催する立場なのだが、これも紆余曲折を経ての実施となった。2月には各学部選出の講演者、講演内容が確定し、広報の準備なども進んでいたのだが、3月には雲行きが怪しくなり、最悪の事態を想定しつつ複数のパターンを準備しておき、結局最も望ましくない(と、このときは思っていた)Zoomによるオンライン開催となった。偶然にも(正式に)最初のオンライン講義が始まった4月20日夕刻、自宅でミーティングを恐る恐る立ち上げた。すると、開始までにどんどん人が入室してきて最終的に400人超の参加者(延べでは700人超)になったのだ。二日目もこの盛況は続いた。講演者の方々においても、急遽開催方法を変更したにもかかわらず全員に参加して頂くことが出来た。通信環境を心配して録

画配信講演の方も含め、十人全ての演者の方々がオンラインで学生の質疑に応じてくださり、感謝の念に堪えない。視聴学生においても、演者に負けないくらいの熱意、そして将来の進路に対し、真剣に向き合っている様子を感じられた。多くの学部によるガイダンスもオンラインで実施され、東大新聞によると、参加者が例年と比べて大幅に増加したところもあったようだ。こうしたインターネット空間を通じた情報享受のシステムは、若い世代にマッチしているのだろう。

このように、積極的にインターネットの世界に溶け込んでいき、制限された中にも活路を見出そうとする人もいれば、やはり不安が先に立ち、閉塞感に押しつぶされそうに感じる人もいるだろう。この原稿を書いている時点では、世界的にはもちろんのこと、日本においても未だコロナ禍は収束を見ていない。しかしながら、高いハードルである東京大学の入学試験を乗り越えてきた君たちが、くすぶったまま、押しつぶされたままであることは得策ではない。君たちにとって幸いなことに、前期課程の学びを主体的に提供する側である東京大学教養学部は、ありとあらゆる分野それぞれにおけるトップレベルの研究者が一堂に会した集団であり、ここで提供される学びは途轍もなく広くて深い。そのコンテンツは、この禍下においてでさえ、それこそ東京大学全学の英知を結集して、質を落とさぬよう最大限の努力で準備をしてきたものである。これらの学びを余すことなく享受すれば、若さの特権であるしなやかな精神性とも協奏し、あらゆる困難を克服する強力な武器となり得ると思うのだ。真偽や玉石が混交した情報が氾濫している中、正誤を判断できる知識や合理的な思考が求められる。是非とも、東京大学の学びを大いに活用して、「正しく恐れる」術を身につけ、新型コロナウイルスがもたらした閉塞感から脱却してほしいと切に願う。

私は、実を言うとポストコロナの世界を楽しみにしている。少しずつ活動制限が解除され、この駒場キャンパスで学生たちに会える日を。はじめてお目にかかるだろうが、きっと雌伏の時を経て成長したであろう新入生、そして、十分ではない情報を駆使して進学選択をし、新たな進路に踏み出していく二年生の姿に目を奪われる日を。